第７回日本言語文化学研究会発表要旨

討論場面における主張と反論のパターンについて

西條美紀

（1994.12.4 発表）

１．はじめに

私達は討論をしなければならない時、どのような主張の展開をするのだろうか。また相手に自分の言いたいことを十分わからせ、相手の論に反論しなければならない時、どういう論理の展開をするのだろうか。その一端を明らかにしようという試みが本論である。

２．先行研究

日本語の論理は点的論理、連想的論理（1987外山）であるとか羅列型（1989森田）であるとか言われているが、実際に、何かまとまったことを論理的に述べる必要があるときには、どういう論理の展開になるのかについては、実証的な研究がなされていない。

３．仮説

１）論理の展開は、同一立論の中、討論全体ともに羅列的な展開になる。

２）主張の根拠は省略されることが多い。

ここで言う根拠とは主張を導くための事実、記録（データ）とデータが主張に結び付くための理論的根拠（ワラント）の両方を指す。例をあげれば以下のようになる。

主張　：ＡさんはＴ自動車の車を使っているだろう。

根拠：ＡさんはＴ自動車の社員だ（データ）

自動車会社の社員は自社製品を使うものだ（ワラント）

4．調査方法

社会人によるディベートの分析。ここではディベートの訓練を受けた人を対象とした。理由は以下のとおり。

1）ディベートという枠組によって、立論を行い、相手に反駁しなければならない状態が作り出される。

2）訓練を受けた人は少なくとも明快な論理で立論をおこなおうとする意志はあり、立論を行う上で必要な知識は訓練中にインプットされている。

3）ゲームという枠組みがあり、初対面であるため、その主張と反論について社会的な諸条件を勘案せずに分析ができる。

調査対象者は会社の派遣などで、民間のディベート訓練機関で訓練を受けているもの4名。

5．手続

調査は肯定側第一立論、否定側第一立論、肯定側第二立論、否定側第二立論、否定側第一反駁、肯定側第一反駁、否定側第二反駁、肯定側第二反駁、各2分を録音し文字化したものを分析した。

6．調査結果

上記の方法で集めた発話資料を発話の意味単位に分け、主張と根拠の展開パターンに分類し集計した。

主張について

1）一つのトピックについて、主張とその根拠が同一発話、あるいは前後の発話で示された場合　3

2）一つのトピックについての主張と根拠が飛び飛びに示された場合　6

3）主張だけが行われ、その根拠が明示的に示されない場合16

反論について

1）一つのトピックについて、相手への反論を根拠を示しながら行い、その繋がりに説得力がある場合　7

2）相手への反論とその根拠は示されているが、相互の繋がりに説得力がない場合　5

3）相手に反論はするが言いきったままで、その根拠が示されない場合　8

7．結論

主張をして、その根拠を同一発話あるいは前後の発話で述べてゆくという展開が少なかった。これは根拠と主張の結び付けが弱いためではないかと考える。反論については個人差がかなりあった。したがってこのサンプルにおいてただちに仮説1は支持されたとは言い切れないが、その傾向は出たとおもう。仮説2については論理的な繋がりについての客観的な基準が出せなかったので、今後の課題としたい。

8．今後の課題

1）サンプルの数を増やし統計的な分析を加味する。

2）主張の裏付けについての下位分類を行い、それぞれの基準を明確にする。

3）今回、分析の基礎においた論理の分析方法であるトールミンモデル（Toulmin, S. 1958）を再検討する。

9．参考文献

TOULMIN, S.　1958　*THE USES OF ARGUMENT*
Cambridge University Press.

メイナード K.
泉子　1993　『会話分析』くろしお出版

（お茶の水女子大学日本言語文化専攻修士2年）